日本列島を覆う海岸漂着ゴミ汚染の実態
―危険な薬品名表示ポリ容器の漂着 ―

防衛大学校　正会員　山口　晴幸

20 世紀の文明社会を象徴した大量生産・廃棄型社会の顛末の一端が、大量漂着ゴミとなって海岸線を襲い、今、我が国の浜辺は激しく漂着ゴミで汚染されている。特に、我々が廃棄したゴミに加え中国・台湾・韓国・ロシアなどの近隣諸国からのゴミが大量に漂着している実態が認められ、国内外からの大量漂着ゴミで海岸線はまさに巨大ゴミ箱と化し、全国的に深刻な社会問題となっている実情を、多くの海岸での漂着ゴミ調査の実態分析から社会的に強く警鐘を鳴らしてきた。1997 年から開始継続している北海道宗谷岬・オホーツク海沿岸から沖縄県与那国島に至る全国主要海岸延べ 718 箇所で数え上げた 92 万個以上に及ぶ漂着ゴミの国籍･種類等に関する調査結果をまとめ、2002 年 6 月には「漂着ゴミ～海岸線の今を追って」と題する書籍を出版(文芸社刊)する機会を得ている。漂着ゴミの構成タイプには、我が国近海の海流と密接な関連があり、海岸域的特長のあることを明らかにしている。黒潮海流ルート近傍の南西諸島では中国・台湾系ゴミが、日本海側対馬海流ルート沿いでは韓国系ゴミが外国製漂着ゴミの圧倒的な量を占め、早急な防止処理対策を確立するためにも発生供給源と漂流漂着ルート解明が不可欠な課題となっている。

写真 1 長崎県対馬 田ノ浜海岸(2000.5.5)

写真 2 長崎県対馬 鰐浦の海岸西側(2000.5.4)

ところで、2000年3月、九州～東北地方の日本海沿岸に掛けて化学薬品名が表示された危険なポリ容器(主に18と20l)が漂着して(写真1と2)、それがあまりにも広範囲で大量であったために社会的問題となった。後の海上保安庁海上環境課の調査で、日本海沿岸に総計約3万8千個漂着したと報告されている。筆者は2000年5月の壱岐・対馬調査でこのポリ容器の大量漂着を確認している(図1と2)。このポリ容器はハングルと中国文字表記のものが主体

(a)長崎県壱岐 清石浜

(b)長崎県対馬 田ノ浜海岸

(c)長崎県対馬 小茂田浜

写真 3 大半はハングル文字表記の化学薬品名表示ポリ容器(2000.5)

キーワード：漂着ゴミ、海浜環境汚染、ポリ容器　/　防衛大学校　建設環境工学科　国土環境工学講座
〒239-8686　神奈川県横須賀市走水 1-10-20、Tel:0468-41-3810、Fax:0468-44-5913、yamaguch@cc.nda.ac.jp

で、その9割以上はハングル文字表記である。青・緑・灰色等のポリ容器には硝酸（HNO_3）、過酸化水素(H_2O_2)、アンモニア水(NH_4OH)、リン酸(H_3PO_4)などの薬品名が表示されている(写真3)。漂流中に内容物が海洋に流出したのかは不明であるが、ほとんど空状態で漂着している。筆者が壱岐・対馬の海岸で確認したポリ容器数を表1にまとめている。壱岐8海岸で126個、対馬10海岸で569個、総計695個を確認している。特に壱岐では清石浜一帯の海岸、対馬では小茂田浜、青海の海岸、田ノ浜などの朝鮮半島に面した西側の海岸域で大量に漂着していた。浜によっては幾度も清掃で集められ、田ノ浜のように集められたポリ容器が山積みされている海岸もあった(写真1)。故意による不法投棄と考えざるを得ないこの大量ポリ容器の漂着事件は、小規模な漂着を含めると断続的に繰返されている。2003年1月にはまた、島根県～福井県で1600個、石川県で1789個、新潟県(写真4)で1131個、山形県で349個、秋田県で347個、青森県で43個と、山陰・北陸・東北の日本海沿岸に大量漂着しているのが海上保安庁により確認されている。対馬・壱岐を中心とした九州沿岸では、薬品名表示ポリ容器の漂着は、2001年と2002年で数万個単位に及ぶとされている。

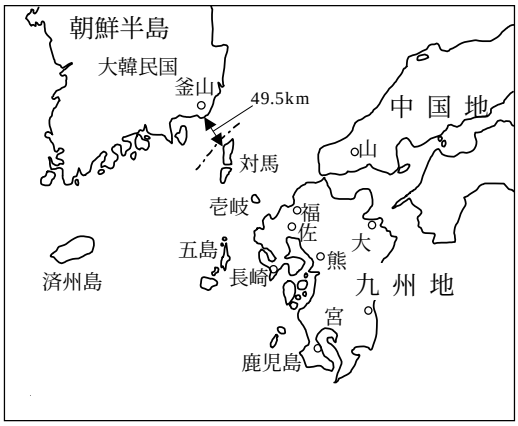

図1 朝鮮半島に隣接する長崎県壱岐と対馬

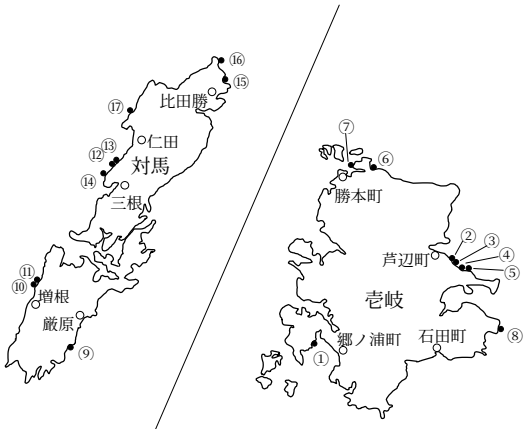

図2 長崎県対馬・壱岐での調査海岸

表1 長崎県対馬・壱岐での薬品名表示ポリ容器調査(2000.4,5月)

地域番号		調査地点	海岸名等	調査日	調査海岸距離（km）	容器(個数)
壱岐	①	郷ノ浦町	渡良浦の海岸	H.12.4.28	0.05	2
	②	芦辺町	清石浜（砂浜）	H.12.4.29	0.20	23
	③	芦辺町	清石浜南側（岩場）	H.12.4.29	0.10	12
	④	芦辺町	清石浜付近の海岸	H.12.4.29	0.05	18
	⑤	芦辺町	漁港脇の砂浜	H.12.4.29	0.15	45
	⑥	勝本町	町営グランド脇の海岸	H.12.4.30	0.15	3
	⑦	勝本町	串山の海岸	H.12.4.30	0.10	5
	⑧	石田町	イルカ供養碑の海岸	H.12.4.30	0.15	18
対馬	⑨	厳原町	尾浦海岸岩場	H.12.5. 1	0.11	1
	⑩	厳原町	小茂田浜（A）	H.12.5. 2	0.20	52
	⑪	厳原町	小茂田浜（B）	H.12.5. 2	0.10	63
	⑫	峰町	青梅の海岸（A）	H.12.5. 3	0.30	55
	⑬	峰町	青梅の海岸（B）	H.12.5. 3	0.30	39
	⑭	峰町	木坂の海岸	H.12.5. 3	0.25	28
	⑮	上対馬町	三宇田浜岩場	H.12.5. 4	0.15	12
	⑯	上対馬町	鰐浦の海岸西側	H.12.5. 4	0.15	36
	⑰	上県町	田ノ浜漁港脇の海岸（越高付近の海岸）	H.12.5. 5	0.31	245*(38)

写真4 新潟県出雲崎町 井鼻海岸（2002.3.16）

このようなポリ容器の大量漂着の実態から判断すると、これらポリ容器は朝鮮半島付近の海域を漂流し、対馬海流に乗って北上しながら、我が国の日本海沿岸の広範な海岸域に漂着するものと推察される。また漂着ゴミなどの漂流・漂着物による海浜汚染問題では、化学薬品類漂着などの有害化学物質による恐ろしい環境汚染問題に踏み込んで防止対策を検討する必要性に迫られる。ちなみに、大半がハングル文字表記のポリ容器であることから、海上保安庁が韓国海洋警察庁に原因究明の照会を行った経緯はあるが、排出先を特定できる情報の入手は困難であるのが実情である。危険なポリ容器を含め多種類の漂着ゴミを対象に、日本海・黄海・東シナ海・太平洋・オホーツク海などの海洋環境保全を目的とした近隣諸国との積極的な話合い・協議が不可欠である。

参考文献:1)山口晴幸(2002.6):「漂着ゴミ～海岸線の今を追って」文芸社出版、2)山口晴幸(2003.3):深刻な海岸漂着ゴミ汚染、月刊「廃棄物」3月号、Vol.29　No.337、日報アイ・ビー　pp.2-25